
序



21世紀に入って、朝鮮半島の危機をめぐって、また「東アジア共同体」構築の議論をめぐって、国際社会における中国の存在はますますその重さを増して来ている。こうした状況下に日本と中国の相互協力はいよいよ不可欠なものとなっているが、現実にはなお相互協力の基礎となるべき相互信頼の関係が築かれているとは言えない状況にある。

戦後日本と中華人民共和国との間に国交がなかった時代には、両国の社会体制の違いが相互理解を妨げる要因として強調されたが、1970年代に入って両国間の国交が正常化し、80年代には中国の経済体制が改革開放政策によって大幅に自由主義市場経済体制に接近して、両国の体制間の差異は急速に縮小した。にもかかわらず日中相互理解は90年代に入って、いっそうの困難に遭遇している。あるいは経済体制とは別に、中国の政治体制が依然自由主義体制になっていないという点が強調されるかもしれない。しかしかつて日中国交正常化以前の時代、台湾の国民党政権が蒋介石、蔣経国親子の独裁体制であった時代、あるいは韓国が朴正熙、全斗煥、盧泰愚と続いた軍事独裁政権であった時代にも、日台、日韓間には友好関係が保たれ、相互理解が可能だった。とすれば、90年代から21世紀にかけて日中相互理解をますます阻害しつつある要因は体制の差異とは別次元のところ根因が存在すると見るのではなくてはならない。

たとえば一昔前、司馬遼太郎をキャスターにしたNHKスペシャル「シルクロード」が爆発的な人気を呼び、シルクロード観光がブームとなる一方、同時代の中国にはほとんど真剣な関心を向けないという姿勢が強くと見られてきた。孔子・孟子・諸子百家・朱子・陽明などの思想家、項羽・劉邦の物語から三国の英雄、李白・杜甫など唐宋の詩人に至るまで、古代中国に対しては時には尊崇の念を持ち、あるいはそこに歴史ロマンを感じて強い関心を示すものの、同時代の中国や中国人に対しては、戦前には軽侮の念を抱き、今日では嫌悪の念を示すといった大きなギャップが存在し続けてきたのである。こうした古代と同時代とを二元的に見る日本人の中国観の「歪み」はどこから来たのか？

現時点で日中間の相互信頼、相互理解を妨げる要因は、目前の問題としては靖国や歴史認識問題を障害として上げることができるが、根本的には両国が19世紀以来歩んできた「近代化」の道のりの違いが常に障害として作用してきた点に見なければならぬ。日本の側から見た場合、本来そこでは日本の中国研究が相互理解のために大きな役割を果たすべきであったのだが、現実には戦前からの漢学、支那学、さらに今日の中国研究を含めて、その働きは極めて不十分なものだった¹。

そこに学問方法上の問題があることは十分に想像し得た。しかしながら今日まで、この方法論の問題は竹内好、溝口雄三など極めて少数の人々によって論じられただけで、本格的な議論はなされて来なかった。そこには学問科学方法論としての原理的問題と、日中という両国間の固有の歴史と地理的關係に彩られた問題の、二つの問題が横たわっている。本書は、この方法論をこの二つの角

度から論じたものである。むろん本書の議論は到底完成版というには程遠い。あくまで複雑で根の深い問題に対する切り口を開く、という目的意識をもって格闘したものに過ぎない。これが端緒となってより本格的な論議が起こされることを期待したい。

2006年10月28日 於日進市赤池寓居
加々美光行

1 ここでは本来は戴季陶に始まって今日に至る中国の日本研究についても述べるべきだが、本論文の重点はあくまで日本の中国研究に置かれているので、ここでは言及しない。